様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：２４４０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２７３０５１４

研究課題名（和文）学生の生涯発達の基盤となるアカデミックライティングと大学での知識生産への参画

研究課題名（英文）Students' academic writing development to participate in the production of knowledge and to make the foundation of ther life-long development

研究代表者
西垣　順子（NISHIGAKI, Junko）

大阪市立大学・大学教育研究センター・准教授

研究者番号：８０３４５７６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,900,000円、（間接経費）　870,000円

研究成果の概要（和文）：１．アカデミックライティングと学生の発達の理論的検討：アカデミックライティング教育の諸理論を批判的に検討し、①ライティング能力の発達がたどるジグザグな変化過程を解明すること、②青年発達の全体像を示すことが必要であると示した。また、大学生は発達の質的転換期にあることを示し、その発達を保障する観点から大学評価のあり方について考察した。
２．教授法開発と授業における学生の変化：ミニッツペーパーの分析を通じて、学生の世界観が構築・再構築されるサイクルにおける書くことの重要性が確認された。また、「学生は知識生産者」という原則の解説を通じたレポート執筆指導法を開発した。

研究成果の概要（英文）：1. Theoretical discussion on students' development and academic writing: Main models of academic writing education were critically investigated, and research tasks of developmental psychology were marshaled into two problems. Firstly, back-and-fill process of academic writing development should be revealed. Secondly, developmental theory of adolescent which covers both cognition and personality should be constructed. The review of proceeding studies revealed that university students are under the period of qualitative transformation, and the way of university evaluation was discussed to ensure the significant development.
2. Development of teaching method and analysis of students' writing. Through the analysis of minutes-papers, the importance of writing on the cyclic process of construction and reconstruction of world view was confirmed. A teaching method of reference in essay-writing was developed, in which the principle that students are knowledge generators was explained.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：アカデミックライティング　大学生　生涯発達　知識生産　大学授業

１．研究開始当初の背景

アカデミックライティング教育については、その重要性が広く指摘され、教授法開発研究も多くある。その一方で、教育成果に限界があることや、一見書けるようになっている学生であっても、「アカデミックライティングとは何か」に関する認識が、教育プログラムによってかえって硬直化する可能性なども指摘されていた。

このような状況が生じる背景には、「学生は何のために書くのか」という問いが学生の視点から十分に検討されていないことがあると考え、アカデミックライティングを「学生の生涯発達の基盤形成」という位置づけから再検討する必要があると考えた。またそれに基づいた教授法開発を行うことにより、学生のライティングを支援できるとともに、大学教育の評価のあり方についても提案ができるのではないかと考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、主に次の３つであった。

① アカデミックライティングを学生の生涯発達の基盤形成という側面から再定義すること。
② ①の立場から、アカデミックライティングの教授法を開発するとともに、アカデミックライティング教育に特化していない通常の授業（「レポート作成法」などの授業ではなく「歴史学」「心理学」などの授業）における学生のライティングがどのように変化するかを明らかにすること。
③ ①②の成果も踏まえつつ、学士課程教育の評価のあり方について検討すること

３．研究の方法

上記の目的①については、平成 22-23 年はアカデミックライティング教育の 3 モデル（スキルベースモデル、学術的社会化モデル、アカデミックリテラシーズアプローチ）について、特にアカデミックリテラシーズアプローチの可能性と課題について理論的な検討を行った。平成 24-25 年度は、人間発達理論において学士課程教育を受ける 20 歳前後がどのように位置づくのかという観点からの理論的な分析を行った。

上記の研究目的②については、歴史学と発達心理学に関連する教養教育科目を受講し、そこで執筆されるミニッツペーパーと教員と学生のやり取りを分析することを通じて、授業に参加して書くことを通じて学生の認識がどのように変化するのかを明らかにしようとした。

また、「学生は知識生産者である」ということや、知識を生産するためには先行諸研究が必要なのだということを教授しながら、レポートの書き方を先行研究の引用の仕方を中心に学ぶ授業を開発し、それを実践した上で学生のレポート等を分析して効果の検証を行った。

上記の研究目的③については、上記①の検討の中で扱った。

４．研究成果

以下に、「２．研究の目的」①から③に示した項目別に示す。

① 学生の生涯発達の基盤形成という側面からのアカデミックライティングの位置づけの理論的再検討

欧米のアカデミックライティング教育において主流になっているアカデミックリテラシーズアプローチは、大学における知識の生産・共有・学修という文脈にライティングを位置付けているという点で意義深く、実践上の示唆も大きいと言える。一方で書かれた文章を分析するという立場が中心になるために、執筆者である学生の成長発達が十分には視野に入りにくいという限界があることを示した。特に教授法開発が視野に入ってくると、学生への指示内容が詳細になりすぎるきらいがあることが、教育哲学領域での「writing frame 批判」と矛盾する可能性等についても検討した【主に論文１】

これらを踏まえて発達心理学として、どのような研究が必要かつ可能であるかについて検討を行い、①大学生のライティング能力の発達変化をＵ字曲線的な変化も含めて詳細に明らかにすることと、②歴史を創る主体としての青年発達の全体像を示すことの２つに整理した。【主に論文３】

② 教授法の開発と学生のライティングの変化

レポート執筆指導を特別には実施しない通常の授業において学生のライティングがどのように変化するかを検討したところ、教員が示す学生には馴染の薄い世界観に、学生は最初は反発を示しつつも、自らが書いたことと教師が回答することのやり取りを通じて、学生の視点が自己中心的なものから、自分とは異なる立場の他者（他国やマイノリティの人々など）の視点も考慮したものへと変化していくことが明らかになった。「書く」という作業は自らの認識を明確化する機会になると同時に、日本の学生は話すことよりも書くことを通じたほうが批判的な検討を行いやすいという先行研究等も踏まえて、学生の世界観の構築・再構築のサイクルにおける書くことの重要性が確認された。

さらに、学生が苦手とすることが多い先行研究の引用について、「学生はなぜレポートを書くのか＝学生は知識生産者であるから」、「レポートではなぜ引用が必要なのか＝知識は未解決の問題であると同時に、他の知識と相互関係を持つことで初めて知識として成立するから」という２つの原則を解説することで、先行研究を適切に引用しながらレポートを執筆する授業を開発した。このような教授法は引用の必要性とポイントの理解に

一定の効果があり、中間レポートでは学生のレポート執筆成績が向上した。その一方で期末レポートではそのような効果は消失していた。期末レポート執筆時は、時間をかけてレポートを作成することができないなどの事情が考えられ、本研究において開発した授業の効果は状況によっては限定的でもあった。【主に論文２と４】

③ 学士課程教育の評価のあり方については、本研究の主要テーマであるアカデミックライティングから直接検討することは難しかった。そこで青年期の人間発達の特徴を、先行研究をレビューして明らかにすることを通じて、大学評価のあり方についても検討した。大学生期が「変換可逆操作の発達の階層」から「抽出可逆操作の発達の階層」への質的変換点であることを踏まえ、その発達を保障するという観点からの大学評価が必要であること、その中では特に、「大学生が 50 年先に向けて何を学ぶかを考えることができているかどうか」や「集団の系の発達（発展）」が鍵となるポイントになることが示された。【主に論文５】

④今後の展望

本研究では、アカデミックライティングが学生の生涯発達において果たす役割について検討できたとともに、教授法の開発についても一定の成果が得られた。その一方で、大学評価のあり方についての示唆は、当初想定していたようには知見を深めるに至りきらなかった。その原因の１つとして、青年期の発達とアカデミックライティングの関係の概念整理が、研究開始時点で不十分だったことがあげられる。本研究開始時点では大学生が発達の飛躍的移行が生じる時期（質的転換期）に相当するという知見は持っていなかった。アカデミックライティングが卒業後も含めた生涯発達の基盤形成になるとは考えていたが、学生の現在の発達的飛躍を推し進める上で重要なものであるというところまでは視野に入っていなかった。そのため、学生の発達保障という観点からの大学評価のあり方の検討という視点は出せたが、そこにアカデミックライティングを十分に位置つけるには検討時間がなりなくなってしまった。

このようなことを踏まえて、大学生期における発達の飛躍的移行を実現するメカニズムのひとつに「知識生産的な学びとの遭遇」を位置付けた発達モデルを構築し、それを検討するための新たな研究プロジェクトを立ち上げている（科学研究費補助金基盤研究（C）に採用が内定）。本研究におけるいくつかの研究成果のうち、「知識生産者としての学び」との遭遇に際しての学生の反応に関する分析結果や、授業において新しい世界観を提示されたときにそれを自らの世界観と統合していくプロセスの検討成果等が、この次の研究プロジェクトには生かされている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

１．西垣順子　2014　「『可逆操作の高次化における階層―段階理論』に基づく大学生の発達」,『人間発達研究所紀要』第 27 号，pp.15-29.【査読有】
２．西垣順子　2012　「学士課程学生に対する先行研究の引用方法に関するレポート執筆指導授業の開発とその効果に関する検討」,『大阪市立大学大学教育』第10巻第1号，pp.1-12.【査読有】
３．西垣順子　2011　「大学におけるライティング教育をめぐる心理学研究の役割：アカデミックライティング教育の現状に対する批判的検討を踏まえて」,『心理科学』第32巻1号，pp.1-8.
４．Junko NISHIGAKI　2011　‘An analysis of university students' perceptional change through course learning and a suggestion to academic writing education in undergraduate curriculum’, “Finding Meaning, Cultures Across Borders: International Dialogue between Philosophy and Psychology”, vol.4, 109-114.
５．西垣順子　2010　「大学生のアカデミックライティング教育におけるアカデミックリテラシーズアプローチの可能性と課題」,『大阪市立大学大学教育』第8巻第1号，pp.47-51.　【査読有】

〔学会発表〕（計４件）

１．西垣順子　2012.11.23　「大学生の「素朴発達観」を揺さぶる教養教育科目の試み１」日本教育心理学会第 54 回総会（琉球大学）
２．西垣順子　2011.06.05　「なぜ引用が必要なのか：レポート執筆に関する学生の認識」大学教育学会第 33 回大会（桜美林大学）
３．Junko Nishigaki　2010.08.19　‘An analysis of university students' perceptional change through course learning and a suggestion to academic writing education in undergraduate curriculum, The 4th International Colloquium between the Graduate School of Education, Kyoto University, and the Institute of Education, University of London　（京都大学）
４．西垣順子　2010.08.27　「学士課程教育におけるアカデミックリテラシー教育の可能性：教育心理学・発達心理学からの研究の可能性と方向性に関する検討」，教育心理学会第 52 回総会（早稲田大学）

〔招待講演〕（計 3 件）

1．西垣順子　2014.02.03　「大学生のリテラシーの発達とそれを促す教育のあり方」, 関西外国語大学 FD シンポジウム「論理的・批判的に読む力の育成をめざして」（於：関西外国語大学）

2．西垣順子　2013.09.09　「大学生の発達と学士課程教育の役割―初年次教育とライティング教育を中心に」了徳寺大学全学教員研修会（於：了徳寺大学）

3．西垣順子　2011.06.29　「大学生の発達と学士課程教育の役割：初年次教育を中心に」名古屋学院大学 FD 研修会（於：名古屋学院大学）

〔図書〕（計 0 件）

6．研究組織

(1)研究代表者

西垣順子（Junko NISHIGAKI）

大阪市立大学・大学教育研究センター・准教授

研究者番号：80345769